

今日の説教のポイント <マタイによる福音書9章35～38節>

①心打たれる個所。それはなぜか？

「(イエス様は) 群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」(36)。イエス様について記された福音書の中でも、心打たれる個所の一つです。理由は二つあると思います。一つは、今の時代、今の社会にオーバーラップするからです。弱り果て、打ちひしがれた人々は今も多く存在します。もう一つは、その様子を見て心を痛められるイエス様が目に浮かぶからです。

しかし、その前の35節に、「ありとあらゆる病気や患いを癒された」とあるのを読んで、やはりイエス様の奇蹟にとまどわれる方があるかもしれません。奇蹟の経験などないのに心打たれていいのかと？

②奇蹟が先か、教えが先か？ どちらでもいい。大事なことは、

イエス様の奇蹟をたくさん記しているマタイですが、彼の特徴は奇蹟よりイエス様の教えを聞くことを先にあるいは上に置いている点にあります。35節もそうです、「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる～」。4章23節でも同じ内容が同じ順番で語られた後、山上の説教(教え!)に入り、奇蹟はその後8章から語られます。イエス様の教えは、私たちに新しいものの考え方や価値観を与えてくれます。それまでの世界で行き詰った人に、全く別の世界があるということ、つまり、この神様によって生かされる世界があることを知らせてくれるものです。だからこそ、御国の福音(good news)なのです。この方に出会い、その教えに出会うこと、これ以上の大きな奇蹟はないと思います。

③いつも私たちと共にいて下さる神様

マタイ福音書は、①洗礼を受けなさい、②イエス様の教えを学び続けなさい、③そうすれば、神様がいつも共にいて下さる、と伝えて終わります(28章最後)。洗礼を受けるだけでも、自己流でイエス様の教えを学ぶことで良しとするだけでも不十分なのです。神様が用意して下さった「主が頭、私たちはその体なる教会」(コロサイ1:18)の肢体となり①、そこで聖書の御教えに謙虚に聞いて学び続ける②、その時に、神様は私たちと共にいて下さると確信できるのです③。